

確かな学力の向上の推進について（中学校）

—全国学力・学習状況調査を活用した授業改善に向けて—

学校経営支援課 尾嶋 麻子 二木 聖子

要 旨

本県における、令和5年度・令和6年度の全国学力・学習状況調査（以下、全国学力調査）の中学校国語・数学の結果を分析した。その結果、両教科とも「記述式」問題において正答率が低く、無解答率が高いこと、そして、根拠や理由を明確にして、自分の思いや考えを表現することが課題として挙げられた。この課題の解決に向け、各種研修において提案を行ったところ、授業改善に関する事例の増加等、一定の成果がみられた。

キーワード：全国学力・学習状況調査、中学校国語、中学校数学

I はじめに

令和6年3月に策定された「徳島教育大綱・徳島県教育振興計画（第4期）」では、重点項目Ⅱとして「個性を活かし、確かな学びを育む教育の推進」を位置付けている。その推進項目4「個性・能力を伸ばし、可能性を拓く教育の推進」では、成果指標として、「全国学力・学習状況調査における県の平均正答率について、令和8年度を目標として、国語、算数（数学）ともに全国平均以上とすること」を掲げている。本県では、この目標の達成を通じて、基礎的な学力の定着を土台とし、自ら考え、判断し、表現できる子供の育成をめざしている。

また、学力向上の施策の一つとして、これまで「すべての教科等にわたる国語力を生かした授業改善のポイント（国語力向上タスクフォースの提案から）」を示してきたが、令和6年度からは、これをブラッシュアップした取組として、「すべての教科等にわたる『徳島版読解力』を生かした学力向上のポイント」を示し、学力向上に取り組んでいる。「徳島版読解力」は、全国学力調査（小学校国語・中学校国語）からみえてきた課題を踏まえ、これからの社会を生きるために必要となる力を示したものである。

このような背景のもと、これまでの研修においても全国学力調査を活用した授業改善について提案を行ってきたが、上記の二つの施策を意識し、さらなる授業改善を進めていきたいと考えている。

本研究では、現行の学習指導要領の趣旨を踏まえ、全国学力調査（令和5年度・令和6年度）の中学校国語及び数学の問題や結果を分析・整理し、本県の課題を明らかにする。その上で、課題解決に向けて必要となる資質・能力を育成するための具体的な授業改善の方法について、研修において提案した内容を示すこととする。

II 研究仮説

徳島県中学校国語・数学の学力向上において、全国学力調査の結果分析より課題を明らかにし、その解決に向けた授業改善の提案を研修会等で行うことにより、確かな学力の向上の推進を図ることができるであろう。

Ⅲ 研究の実際

1 全国学力調査の結果の分析（中学校国語）

（1）令和5年度中学校国語について

① 結果概要

本県の全体平均正答率は68%（整数値で公表）で、全国69.8%を下回ったものの、大きな差はみられない。全国を下回っている区分のうち主なものは、内容別における「思考力、判断力、表現力等」の「書くこと」59.3%（-3.9pt）、「読むこと」60.3%（-3.4pt）、問題形式別の「記述式」63.1%（-4.9pt）である（表1）。なお、本文中の（ ）内は、全国との正答率の差をポイント（pt）で示したものであり、以下同様に示すものとする。

表1 令和5年度全国学力調査の概要（中学校国語）

分類	区分		問題数 (問)	平均正答率(%)	
				徳島県	全国
全体			15	68	69.8
学習指導 要領の 内容	知識 及び 技能	(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項	2	66.6	67.5
		(2) 情報の扱い方に関する事項	2	62.1	63.4
		(3) 我が国の言語文化に関する事項	3	75.1	74.7
	思考力、 判断力、 表現力等	A 話すこと・聞くこと	3	80.8	82.2
		B 書くこと	2	59.3	63.2
	C 読むこと	4	60.3	63.7	
評価の 観点	知識・技能		7	68.9	69.4
	思考・判断・表現		9	66.9	69.7
	主体的に学習に取り組む態度		0	—	—
問題形式	選択式		7	72.4	73.1
	短答式		4	65.3	65.6
	記述式		4	63.1	68.0

② 問題別集計結果

問題別の正答率に着目し、次のとおり、成果と課題を整理する。ここでいう成果・課題は、各設問における正答率の全国平均との差に基づいたものであり、以下同様に示す。

【成果】

大問4一 歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直して読むことができるかどうかをみる
正答率 89.0%（+6.5pt）

【課題】

課題がみられた設問について表2に示す。

表2 令和5年度 課題がみられた設問（中学校国語）

設問	出題の趣旨（出題の意図、把握しようとする力等）	正答率(%)	差(pt)	無解答(%)	差(pt)
大問1四	聞き取ったことを基に、目的に沿って自分の考えをまとめることができるかどうかをみる	78.8	-3.7	15.2	+4.4
大問2四	文章を読んで理解したことなどを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりすることができるかどうかをみる	63.9	-3.6	5.9	+2.0
大問3三	具体と抽象など、情報と情報との関係について理解しているかどうかをみる	56.8	-5.0	3.4	+1.3
大問3四	自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にして書くことができるかどうかをみる	66.5	-5.6	14.5	+4.3
大問4三	文章の構成や展開、表現の効果について、根拠を明確にして考えることができるかどうかをみる	43.3	-6.7	27.2	+6.5

「記述式」は4問出題（大問1四、大問2四、大問3四、大問4三）されており、それら全てにおいて、正答率は全国を下回り、無解答率も全国より高くなっている。特に、情報と情報との関係について理解すること、根拠を明確にすることに課題がみられる。

③ 解答類型の結果

上記の【課題】の中から、解答類型の結果について整理する。

大問3三 『判じ絵』とは何か」と見出しを付けた部分について、内容のまとまりで文章

が二つに分かれる箇所を選択し、後半のまとまりに付ける見出しを書く
(正答の条件)

(a) 内容のまとまりを分ける箇所として(ウ)を選んでいる。

(b) 後半のまとまりに付ける見出しを、「『判じ絵』の歴史」、「『判じ絵』の起源と広がり」のように解答している。

【反応率】 解答類型2 条件(a)を満たし、条件(b)を満たさないもの 14.1%

解答類型3 条件(b)を満たし、条件(a)を満たさないもの 4.7%

解答類型2、3の反応率の合計は18.8%である。解答類型2に該当する生徒は、内容のまとまりで適切に分けることはできているが、(ウ)以降の内容に共通する要素を抽出し、見出しを考えて書くことができていない。文章の(ウ)よりも前の部分を含めたり、(ウ)以降の文章の一部分のみに着目したりして見出しを考えたものと考えられる。

大問4三 現代語で書かれた「竹取物語」のどこがどのように工夫されているかについて、
古典と比較して書く

(正答の条件)

(a) 【授業で読んだ「竹取物語」の一部】や【学校図書館で見つけた「竹取物語」の一部】の表現を取り上げて書いている。

(b) (a)について、どのように工夫されていると考えられるかを書いている。

【反応率】 解答類型2 条件(a)を満たし、条件(b)を満たさないもの 7.7%

解答類型3 条件(b)を満たし、条件(a)を満たさないもの 16.6%

解答類型2、3の反応率の合計は24.3%である。解答類型2に該当する生徒は、表現を取り上げて書くことはできているが、その表現が文章の内容を伝えたり印象付けたりする上でどのように働いているかを考えることができていないものと考えられる。解答類型3に該当する生徒は、文章の中の具体的な表現に着目すること、つまり、根拠を明確にすることに課題があるものと考えられる。

(2) 令和6年度中学校国語について

① 結果概要

本県の全体平均正答率は57%で、全国58.1%を下回ったものの、大きな差はみられない。全国を下回っている区分のうち主なものは、内容別における「思考力、判断力、表現力等」の「書くこと」61.1%(-4.2pt)、問題形式別の「記述式」41.8%(-3.7pt)である(表3)。

② 問題別集計結果

問題別の正答率に着目し、次のとおり、成果と課題を整理する。

【成果】

大問4三 行書の特徴を理解しているかどうかをみる
正答率 79.2% (+3.6pt)

【課題】

課題がみられた設問について表4に示す。

表3 令和6年度全国学力調査の概要(中学校国語)

分類	区分	問題数(問)	平均正答率(%)		
			徳島県	全国	
全体		15	57	58.1	
学習指導要領の内容	知識及び技能	(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項	3	58.2	59.2
		(2) 情報の扱い方に関する事項	2	58.7	59.6
		(3) 我が国の言語文化に関する事項	1	79.2	75.6
	思考力、判断力、表現力等	A 話すこと・聞くこと	3	57.2	58.8
		B 書くこと	2	61.1	65.3
C 読むこと		4	48.3	47.9	
評価の観点	知識・技能	6	61.9	62.0	
	思考・判断・表現	9	54.1	55.4	
	主体的に学習に取り組む態度	0	—	—	
問題形式	選択式	9	60.7	61.0	
	短答式	3	62.1	61.8	
	記述式	3	41.8	45.5	

表4 令和6年度 課題がみられた設問（中学校国語）

設問	出題の趣旨（出題の意図、把握しようとする力等）	正答率(%)	差(pt)	無解答(%)	差(pt)
大問1四	話合いの話題や展開を捉えながら、他者の発言と結び付けて自分の考えをまとめることができるかどうかをみる	42.0	-2.7	12.4	+2.5
大問2四	目的に応じて必要な情報に着目して要約することができるかどうかをみる	40.5	-2.1	13.3	+4.9
大問3二	文の成分の順序や照応について理解しているかどうかをみる	50.3	-3.5	1.4	+0.4
大問3四	表現の効果を考えて描写するなど、自分の考えが伝わる文章になるように工夫することができるかどうかをみる	42.9	-6.4	20.9	+5.9

「記述式」は3問出題（大問1四、大問2四、大問3四）されており、それら全てにおいて、正答率は全国を下回り、無解答率も全国より高くなっている。特に、目的に応じて必要な情報に着目すること、表現の効果を考えて工夫することに課題がみられる。

③ 解答類型の結果

上記の【課題】の中から、解答類型の結果について整理する。

大問2四 本文に書かれていることを理解するために、着目する内容を決めて要約する（正答の条件）

- (a) アとイのいずれか一つの〈着目する内容〉を選んで、その記号を塗り潰している。
- (b) 選んだ〈着目する内容〉について、必要な情報を適切に取り上げて書いている。
- (c) 選んだ〈着目する内容〉について、まとめて書いている。

【反応率】 解答類型2 条件(a)、(b)を満たし、条件(c)を満たさないもの 0.0%

解答類型3 条件(a)、(c)を満たし、条件(b)を満たさないもの 31.2%

解答類型3は31.2%にのぼる。該当する生徒は、選んだ〈着目する内容〉と自分が書いた要約とを照らし合わせて、必要な情報を十分に取り上げているかを確認することや自分が書いた要約の内容と本文の内容とに齟齬がないかを見直すことができていないと考えられる。

大問3四 表現を工夫して物語の最後の場面を書き、工夫した表現の効果を説明する（正答の条件）

- (a) アに、「あの日から数日が過ぎた。」に適切に続くように、表現を工夫して物語の場面を書いている。
- (b) イに、アのように表現することで、「僕」の次の出番への期待を伝える上で、どのような効果があるのかを具体的に書いている。

【反応率】 解答類型2 条件(a)を満たし、条件(b)を満たさないもの 27.7%

解答類型3 条件(b)を満たし、条件(a)を満たさないもの 0.8%

解答類型2、3の反応率の合計は28.5%である。合計の大部分を占める解答類型2に該当する生徒は、自分が工夫した表現について、どのような効果があるのかを考えることができていないものと考えられる。

(3) 調査結果からみえてきた本県の課題を解決するために必要とされる活動

- ① 自分の思いや考えを書くことで伝える活動
- ② 「知識及び技能」で身に付けた力を、話したり聞いたり書いたり読んだりする場面で活用できるようになる活動
- ③ 自分の考えが伝わるように、根拠を明確にする活動

2 全国学力調査の結果の分析（中学校数学）

（1）令和5年度中学校数学について

① 結果概要

本県の全体平均正答率は51%で、全国と同じである。区分ごとにみても全国との大きな差はみられない。下回っている区分としては、評価の観点別の「思考・判断・表現」39.9%(-1.7pt)、問題形式別の「記述式」39.9%(-1.7pt)などが挙げられるが、区分の平均値では、全国との差は小さい（表5）。

表5 令和5年度全国学力調査の概要（中学校数学）

分類	区分	問題数 (問)	平均正答率(%)	
			徳島県	全国
	全体	15	51	51.0
学習指導 要領の 領域	A 数と式	5	65.2	63.0
	B 図形	3	31.8	33.2
	C 関数	4	50.6	51.2
	D データの活用	3	48.8	48.5
評価の 観点	知識・技能	10	57.1	55.7
	思考・判断・表現	5	39.9	41.6
	主体的に学習に取り組む態度	0	—	—
問題形式	選択式	4	48.2	45.3
	短答式	6	63.0	62.6
	記述式	5	39.9	41.6

② 問題別集計結果

問題別の正答率に着目し、次のとおり、成果と課題を整理する。

【成果】

大問2 数と整式の乗法の計算ができるかどうかをみる

正答率 82.4% (+1.9pt)

【課題】

課題がみられた設問について表6に示す。

表6 令和5年度 課題がみられた設問（中学校数学）

設問	出題の趣旨（出題の意図、把握しようとする力等）	正答率(%)	差(pt)	無解答(%)	差(pt)
大問6(3)	結論が成り立つための前提を、問題解決の過程や結果を振り返って考え、成り立つ事柄を見だし、説明することができるかどうかをみる	41.7	+0.8	28.0	+3.3
大問7(2)	複数の集団のデータの分布の傾向を比較して捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明することができるかどうかをみる	31.2	-2.4	28.5	+5.7
大問8(3)	事象を数学的に解釈し、問題解決の方法を数学的に説明することができるかどうかをみる	37.2	-5.6	15.8	+2.6
大問9(1)	ある事柄が成り立つことを構想に基づいて証明することができるかどうかをみる	28.6	-3.5	32.0	+7.3

ここに挙げた4問は、全て「記述式」である。大問6(3)を除き、正答率が全国を下回り、無解答率も全国より高い。

（2）令和6年度中学校数学について

① 結果概要

本県の全体平均正答率は54%で、全国52.5%を上回っている。区分ごとにみてもほぼ全国を上回っている。下回っているものとして、領域別の「データの活用」55.0%(-0.5pt)が挙げられるが、区分の平均値では、全国との差は小さい（表7）。

表7 令和6年度全国学力調査の概要（中学校数学）

分類	区分	問題数 (問)	平均正答率(%)	
			徳島県	全国
	全体	16	54	52.5
学習指導 要領の 領域	A 数と式	5	55.0	51.1
	B 図形	3	40.4	40.3
	C 関数	4	61.4	60.7
	D データの活用	4	55.0	55.5
評価の 観点	知識・技能	11	64.5	63.1
	思考・判断・表現	5	30.6	29.3
	主体的に学習に取り組む態度	0	—	—
問題形式	選択式	5	58.7	58.5
	短答式	6	69.2	67.0
	記述式	5	30.6	29.3

② 問題別集計結果

【課題】

課題がみられた設問について表 8 に示す。

表 8 令和 6 年度 課題がみられた設問（中学校数学）

設問	出題の趣旨（出題の意図、把握しようとする力等）	正答率(%)	差(pt)	無解答(%)	差(pt)
大問 7 (2)	複数の集団のデータの分布の傾向を比較して読み取り、判断の理由を数学的な表現を用いて説明することができるかどうかをみる	25.6	-0.3	35.8	+6.4
大問 8 (2)	事象を数学的に解釈し、問題解決の方法を数学的に説明することができるかどうかをみる	16.1	-1.0	20.6	+4.2
大問 9 (1)	筋道を立てて考え、証明することができるかどうかをみる	26.9	+1.1	39.8	+6.2
大問 9 (2)	事象を角の大きさに着目して観察し、問題解決の過程や結果を振り返り、新たな性質を見いだすことができるかどうかをみる	24.7	-2.0	4.3	-0.2

大問 9 (2) を除く 3 問は「記述式」である。大問 7 (2)、大問 8 (2) において、正答率は全国を下回り、無解答率も全国より高い。大問 9 (1) は正答率は全国より高いものの、無解答率が高い。また、大問 9 (2) は「選択式」であるが、正答率が低い。

(3) 令和 5 年度・令和 6 年度 解答類型の分析

各年度の結果概要では、正答率が全国を上回る（又は、全国と大きな差がない）結果もみられたが、問題別集計結果からは、「思考・判断・表現」を問う問題、特に「記述式」において、課題がみられた。そこで、この課題をより詳細に分析するため、「記述式」の解答の質的な側面に着目し、解答類型の結果を分析する。

中学校数学では、解答類型として、正答を「◎」と「○」に分けて分類している問題がある。「◎」は「解答として求める条件を全て満たしている正答」であり、問題が要求する計算、論理、表現の全ての条件を満たしている。一方、「○」は、「問題の趣旨に即し必要な条件を満たしている正答」であり、出題の趣旨に沿った「知識・技能」や考え方については答えられていると認められるものである。

採点及び統計的な学力の把握においては、「○」の生徒は、問題がはかろうとしている力を達成しているとみなされる。しかし、「○」の解答は、論理的な表現や説明の完全性に課題が残っているとみえる。誤答であった生徒への指導が必要であることはいうまでもないが、「○」の生徒に対しても、「◎」をめざす指導を行うことが、学習指導の改善・充実を図る上で重要である。

① 令和 5 年度 解答類型の結果

前述の【課題】の中から、解答類型の結果について分析する。

大問 7 (2) 「2006年～2020年の黄葉日は、1991年～2005年の黄葉日より遅くなっている傾向にある」と主張することができる理由を、箱ひげ図の箱に着目して説明する。

(正答の条件)

次の(a)、(b)、(c)のいずれかと、(d)について記述しているもの。

- (a) 1991年～2005年の箱ひげ図の箱よりも2006年～2020年の箱ひげ図の箱の方が右側にあること。
- (b) 1991年～2005年の第1四分位数よりも2006年～2020年の第1四分位数の方が大きく、1991年～2005年の第3四分位数よりも2006年～2020年の第3四分位数の方が大きいこと。

- (c) 1991年～2005年の第3四分位数よりも2006年～2020年の第1四分位数の方が大きいこと。
- (d) 2006年～2020年の黄葉日は、1991年～2005年の黄葉日より遅くなっている傾向にあること。

【反応率】

「◎」 解答として求める条件を全て満たしている正答

- (a)、(d)について記述しているもの 9.2%
- (b)、(d)について記述しているもの 3.2%
- (c)、(d)について記述しているもの 0.8%

「○」 問題の趣旨に即し必要な条件を満たしている正答

- (a)のみを記述しているもの 13.6%
- (b)のみを記述しているもの 3.4%
- (c)のみを記述しているもの 0.8%

本問題の正答全体(31.2%)のうち、「○」の解答類型を合計すると17.8%となり、正答全体の過半数(約57%)を占める。これは、正答であっても、根拠と成り立つ事柄のうち、根拠のみの記述にとどまるなど、説明の完全性に依然として課題が残っている生徒が一定数存在していることを示している。

② 令和6年度 解答類型の結果

大問7(2) 車型ロボットについて「速さが段階1から段階5まで、だんだん速くなるにつれて、10cmの位置から進んだ距離が長くなる傾向にある」と主張することができる理由を、5つの箱ひげ図を比較して説明する。

(正答の条件)

次の(a)又は(b)について記述しているもの。

- (a) 箱ひげ図の箱がだんだんと右側にずれていっていること。
- (b) 第1四分位数と第3四分位数がだんだんと大きくなっていること。

【反応率】

「◎」 解答として求める条件を全て満たしている正答

- (a)について記述しているもの 4.9%
- (b)について記述しているもの 4.2%

「○」 問題の趣旨に即し必要な条件を満たしている正答

- (b)以外で、四分位数のいずれかの値がだんだんと大きくなっていることについて記述しているもの 16.5%

本問題の正答全体(25.6%)のうち、「○」の解答類型を合計すると16.5%となり、正答全体の約65%を占める。「○」の生徒の記述は、第1四分位数、中央値、第3四分位数のいずれかの値にしか着目できておらず、箱ひげ図全体を捉えた完全な説明とはなっていない。問題の趣旨である「分布の傾向を比較して読み取る」ための主要な要素は捉えているが、その記述表現が不十分で、論理的なつながりや適切な用語の使用といった形式的な条件の一部を満たしていない。複数の集団のデータの分布の傾向を比較して捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明することには、依然として課題があると考えられる。

(4) 調査結果からみえてきた本県の課題を解決するために必要とされる活動

- ① 用語や概念の意味などを言語化する活動
- ② 「知識及び技能」で身に付けた力を活用し、根拠を明確にして、数学的な表現を用いて説明する活動

3 課題解決に向けた取組（中学校国語）

(1) 令和5年度授業づくり研修会における取組

大問3三「判じ絵」を題材とした問題において、「具体と抽象など、情報と情報との関係について理解している」ことに課題がみられたため、この題材を用いて「レポートを書く」という授業の提案を行った（図1）。

参加している教員は、文章が二つに分かれる箇所を選択した上で、後半のまとまりに見出しを書くという活動を個人で行ったあと、「分けた箇所」「付けた見出し」についてグループで話し合った。「分けた箇所」の発表では、「ただし」「言ってみれば」「また」「そして」「さらに」という接続する語句に着目した分け方と、内容のまとまりを意識した分け方が出てきた。「付けた見出し」の発表では、「起源」「平安時代後期から」「江戸時代に」「明治に」「現代でも」という言葉に着目した答えが出てきた。ここでは、このように、教員が問題を解くときに意識することなく自然と使っている資質・能力を、授業で「意図的に」生徒に身に付けさせることの重要性を確認した。今回の活動であれば、「なぜそこで分けたのか」「なぜそのような見出しを付けたのか」のような、理由を説明する活動を設定することが大切だと伝えた。

研修後のアンケートでは、『「具体と抽象の関係」の理解について、新聞記事にタイトルを付けるという活動を行い、具体的な事例とそれをまとめる言葉との関連を、実践を通して学ぶ機会をもった。』という回答があり、具体的な実践につながっている事例がみられた。

(2) 令和6年度授業づくり研修会における取組

大問2四「目的に応じて必要な情報に着目して要約すること」に課題がみられたため、「説明的な文章を読む」という授業の提案を行った。

はじめに、参加している教員に、「要約するとはどのようなことか。」と尋ねたところ、「文章全体を短くまとめること。」「部分（段落など）を短くまとめること。」という答えが返ってきた。このことは、このように捉えている教員が一定数いる可能性を示している。

要約するという活動は小学校でも行っており、ただ文章を短くまとめるという活動では、中学校の指導事項を身に付けたことにはならない。中学校では、小学校の指導事項を踏まえ、「目的を明確にした上で要約に取り組むようにするとともに、要約したものが目的に沿っているかどうかを考え、必要な情報を正確に捉えて要約できるようにすることが重要」となる。そこで、生徒の小学校での学びなど、これまでの学びを教員が意識すること、つまり、系統性を意識した授業を行うことが重要であるということ共有した（図2）。

続いて、要約についての授業の具体像を考えられるように、参加している教員に、「健

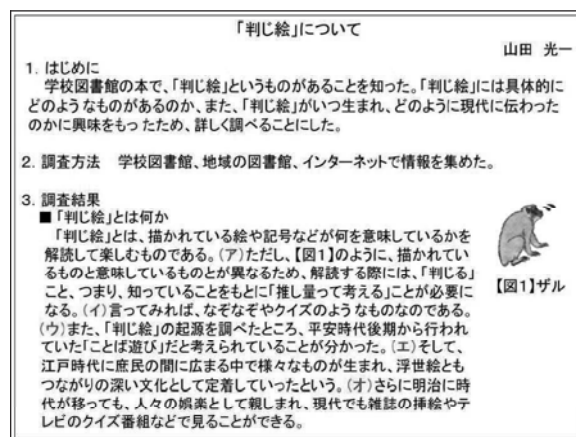


図1 「授業づくり研修会」で用いたスライド

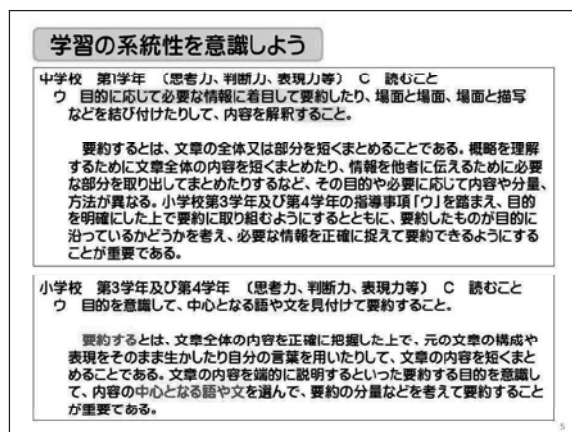


図2 「授業づくり研修会」で用いたスライド

康づくりのための睡眠ガイド2023(こども版)」という資料を基に、「〇〇な人のための睡眠コラム」を書くという活動をしてもらった。同じ資料を基にしているとしても、対象者(〇〇な人)が違えば必要な情報が違うことや、要約する目的が変わると内容や分量も変わることを体験することで、これまでの自分の要約の指導について振り返る機会とした(図3)。

さらに、自分がまとめた要約文を見直す活動を行った。ここでは、見直しの視点を生徒が考えられるように、教師が用意した要約文を基に意見を交換する活動の例を示した(図4)。見直しまで行うことが指導事項を身に付けさせるために必要であることや、その際に、見直しの視点を確認することが大切であることを共有した。

大問3四「表現の効果を考えて描写するなど、自分の考えが伝わる文章になるように工夫すること」に課題がみられたため、「物語を創作する」という授業の提案を行った。

「中学校学習指導要領解説」では、「様々な場面の中で生きて働く『知識及び技能』として身に付けさせるために、思考・判断し表現することを通じて育成を図ることが求められるなど、『知識及び技能』と『思考力、判断力、表現力等』は、相互に関連し合いながら育成される必要がある。」と示されている。表現の技法の学習を例に挙げると、比喩などの名称、その意味や用法を理解するだけでなく、話や文章の中で使うことが求められている。しかし、実際の授業では、名称を覚えたり、どの表現の技法が用いられているかを答えたりするなど、知識の習得のみで終わっている活動がみられる。今回、参加している教員が、「物語を創作する」というまとめた文章を書く活動の中で、「語順を変えると、伝わり方がどのように変わるかを説明する」という活動をする中で、生きて働く「知識及び技能」にするための学習活動の在り方を考える機会とした(図5)。

さらに、この提案の際には、「言語活動を通して」という言葉の確認も行った。国語科の目標に、「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」という表現がある。しかし、言語活動を通して資質・能力を育成するという言葉の理解が十分ではなく、言語活動そのものが目的

授業アイディア例1 説明的な文章を読む

⑤ どのような人を対象とした「睡眠コラム」にするのかを決め、必要な情報に着目して要約する。

<p>[Aさんがまとめた要約文の例]</p> <p>〈普段から運動をしている皆さんへ〉 進級に伴い課外活動が増え、生活習慣が大きく変化し、睡眠時間にも影響することがあります。睡眠には、心身の休養と、脳と身体を成長させる役割があり、睡眠は心身の健康にとって重要ですが、適度な運動はよい眠りにつながりますが、就寝前1時間以内の激しい運動はかえって睡眠の質を低下させるので、寝る直前の運動は控えましょう。</p>	<p>[Bさんがまとめた要約文の例]</p> <p>〈デジタル機器をよく使う皆さんへ〉 デジタル機器の使用が増えると、睡眠負債が蓄積しやすくなります。また、ディスプレイの視距離が近いとブルーライトを浴びやすく、寝付きや睡眠の質が悪化します。スクリーンタイムが長くなりすぎないようにし、デジタル機器は寝室には持ち込まず、電源を切って別の部屋に置いておきましょう。</p>
--	---

図3 「授業づくり研修会」で用いたスライド

授業アイディア例1 説明的な文章を読む

⑥ 要約文の内容を吟味している様子を把握し、元の文章の内容を正確に捉えて要約していない場合、要約文を吟味する視点を全体で共有する。

このあと、自分がまとめた要約文を見直して、よりよいものに仕上げます。どのような視点で見直すかよいかを考えるために、次に示す要約文を読んで、気になったことについて意見を交換しましょう。

[教師が用意した要約文の例]

〈睡眠不足ぎみの皆さんへ〉
 思春期が始まる頃から夜寝る時刻が遅くなって、朝起きるのが難しくなる傾向が見られます。睡眠不足が続くと病気になるので、予防対策が重要です。寝そべりながらデジタル機器を使うと、寝付きや睡眠の質の悪化につながるため、デジタル機器を寝室に持ち込まないようにしましょう。

図4 「授業づくり研修会」で用いたスライド

～「言葉の決まり」を使える知識に～

[板書例]

<p>○ 語順を変えると、伝わり方がどのように変わるかを説明してみよう。</p>	<p>A 君との距離は、ずいぶん遠くなりました。</p>
<p>● 説明の手がかり ・ 注目の文の成分 ・ 文の成分の位置関係 ・ 伝わり方や効果</p>	<p>B ずいぶん君との距離は、遠くなりました。</p>
<p>何がいいたいのかが分かりやすいのは、Aだと思います。主部である「君との距離は」がはじめに示されていて、語り手が「君」との関係について述べていることがはっきりしているからではないでしょうか。</p>	<p>C 君との距離は、遠くなりました。</p>
<p>Aが分かりやすいと感じるのは、「ずいぶん」という修飾語の位置にも関係しているのではないのでしょうか。</p>	<p>Bは、声に出して読むと面白い感じがします。文の最後まで読まない「ずいぶん」という修飾語が何を詳しくしているか分からないからですね。Cは、「ずいぶん」の重みが増えますね。印象的な感じがします。</p>

図5 「授業づくり研修会」で用いたスライド

となった授業をみることがある。

環境問題をテーマとして意見文を書くという活動を例に挙げると、言語活動は「意見文を書く」ということであり、「育成を目指す資質・能力」は「根拠を明確にしながら、自分の考えが伝わる文章になるように工夫すること（第1学年）」である。教員が、このような育成を目指す資質・能力を意識して授業を行っている、テーマや言語活動が変わったとしても、生徒は身に付けた資質・能力を生かして書くことができる。そこで、学習内容（育成を目指す資質・能力）と言語活動について理解できるよう、意見文の例も挙げながら、丁寧に確認を行った（図6）。

研修後のアンケートでは、「要約について説明の仕方などが再確認でき、授業計画について改善ができた。」「要約の仕方は難しいと思っていたが、今回の研修で教えていただいたことを授業で取り入れたいと思う。」「物語の中の表現に着目し、その効果を考えて終わりではなく、それを自分の言葉で説明したり話し合ったりするなど、生きた知識になるような活動を取り入れたい。」という回答がみられ、研修内容を十分に理解し、実践につなげようとする様子が見えられた。

4 課題解決に向けた取組（中学校数学）

(1) 知識及び技能の習得に関する授業改善の取組

ここでは、全国学力調査及び徳島県学カステップアップテストの結果から明らかになった、本県生徒の知識及び技能に関する課題を踏まえ、授業改善につなげることをねらいとした基本研修（フレッシュ研修Ⅰ・Ⅱ）での取組について述べる。

まず、参加している教員とともに、全国学力調査、徳島県学カステップアップテストの結果を基に、本県の課題を共有した。徳島県学カステップアップテストに出題されていた「60を素因数分解する」問題は、県平均正答率が85.3%と高水準であった。一方で、全国学力調査、徳島県学カステップアップテストの両調査で出題されていた「自然数の中から素数を選択する」問題については、正答率が3割程度にとどまった。

参加している教員に対し、このような結果を伏せた上で正答率を予想してもらったところ、6割を超えているとの予想がほとんどであった。このことは、教員が、計算はできるものの用語や概念の意味を問う問題に課題を抱える生徒の実態を十分に認識できていない可能性を示しており、さらに、一定数の生徒において、教員が既知としている用語や概念が必ずしも正確に理解されておらず、知識が単なる暗記にとどまり、活用できる状態に至っていないことを示唆している。このような生徒の概念理解の曖昧さは、問題文を正確に読み取ることの困難さや、根拠に基づいて説明をする力の不足といった課題の要因となっていると考えられる。そこで、授業においては、基礎的・基本的な知識及び技能を単なる知識や解法として暗記させるのではなく、生徒が用語や概念を能動的に活用し、それを用いて論理的な思考過程を表現する活動を重視する必要があると考えた。

研修では、こうした点を踏まえ、「連立方程式を解く」を題材として、それぞれの実践について話し合う活動を行った。参加している教員からは、「一次方程式の復習をしてから授業に

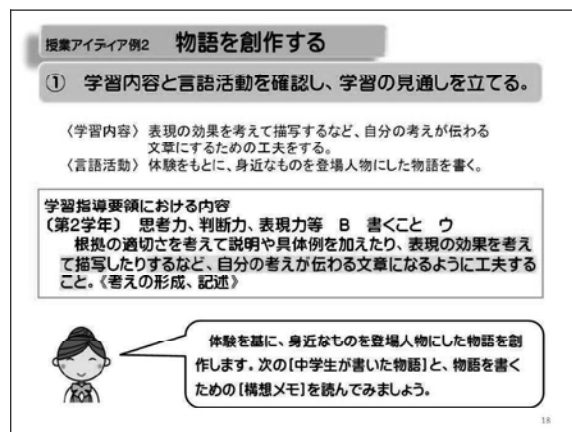


図6 「授業づくり研修会」で用いたスライド

入る」「解く過程を丁寧に説明している」といった、教師主導・説明中心の授業展開が多く報告された一方で、その結果として、「生徒が授業に対して受け身になる」「あるいは初見の問題が解けない」といった課題が指摘された。教師が解き方を丁寧に教え、生徒が繰り返し問題を解くことは、機械的に解けば答えが出る問題の正答率を高くする一方で、概念を問う問題を解くことができないという課題を生じさせている可能性がある。

研修のまとめとして、従来の「教師が解き方をわかりやすく教える授業」(図7)から、「生徒が自ら気づき、考え、表現する授業」(図8・図9)への転換を提言した。発問の仕方や問い返しを工夫し、生徒主体の学びを中心とした授業を行うことで、生徒は既習事項と現在の課題を結び付けて考える「学び方」を習得する。この学習過程そのものが、新たな単元を学ぶ際にも活用可能であり、それにより、生徒の自立的な学習能力の向上にもつながると伝えた。

なお、近年、基本研修に参加している教員の実践報告や、学校訪問での研究授業からは、発問の仕方や問い返しを工夫して生徒主体の学びをめざした実践、数学的な表現を用いて説明させる活動を積極的に取り入れた実践が多くみられるようになっており、研修で共有した内容が少しずつ浸透してきた様子がうかがえる。

(2) 「記述式」問題の無解答率改善と表現力育成に向けた取組

ここでは、「記述式」問題における課題に着目し、改めて無解答率の状況を確認するとともに、その改善に向けた指導の在り方について職務研修(学力向上推進員研修会)で共有した内容を整理し、その意義について述べる。

本県では、「記述式」問題における無解答率が高いことが特に大きな課題である。令和5年度、6年度は「記述式」がそれぞれ5問出題されていたが、全ての問題において無解答率が全国平均より高く、全体で約3割の生徒が無解答であった。生徒は、思考の過程や、その結果として得られた事実や方法、判断の根拠を数学的な表現を用いて説明する力に課題を抱えている。

全国学力調査結果の分析を踏まえると、用語や概念の正確な定義を問う問題の正答率が低いことと、「記述式」問題における無解答率の高さとの間には、一定の関連がある可能性が示唆される。研修では、この点を踏まえ、概念理解の曖昧さが、「記述式」問題において解答に至らない要因の一つになっていると整理した。

研修では、この課題に対応するため、全国学力調査大問7(2)「車型ロボットの速さと進

図7 基本研修で用いたスライド

図8 基本研修で用いたスライド

図9 基本研修で用いたスライド

んだ距離」に関する問題（5つの箱ひげ図を比較し、傾向を説明する）を題材として取り上げた。参加している教員は、まず誤答生徒への指導を検討したのち、「○」の生徒を「◎」へ引き上げるための指導の方法について話し合った。

話し合いの中では、「数学的な用語を正確に用いる」「説明の仕方のモデル（ひな形）を準備する」といった意見が出された。このとき、全国学力調査において示されている「記述式」問題の出題意図や、説明に求められる構造（根拠と成り立つ事柄を対応させて記述することなど）を、具体的な正答例（図10・図11）を基に共有した。

図10 職務研修で用いたスライド

図11 職務研修で用いたスライド

その上で、記述の構成要素が明確に判断できる評価規準を設定することが、指導の改善に不可欠であることを確認した。

「記述式」問題における課題は、領域を問わず共通してみられるものであるが、今回の題材である「データの活用」の領域では、データの分布の傾向を比較し、判断の理由を説明する活動を重視するとともに、箱ひげ図の箱の位置や四分位数といった具体的な要素を根拠として、数学的な表現を用いて的確に説明できるよう指導することが特に重要であることを確認した。また、その中で、「○」を「◎」とするために何が不足しているのかを、生徒自身の解答を基に具体的にフィードバックすることの有効性を強調した。このような「不十分な説明を十分な説明にしていく活動」を授業に継続して取り入れることで、生徒は自己の記述における課題を明確に認識できるようになり、表現力の深化につながることを期待できる。

上記の議論を踏まえ、具体的な指導の工夫を2点示した。

1点目は、記述指導を小さなステップで行うことである。「記述式」問題を、「データなどの確認・読み取り」「判断の根拠となるもの」「数学的な用語を用いた表現への変換」といった小さなステップに分けると、どこから取り組めばよいのかが明確になり、また、その際に、用語や既習事項をあらかじめ提示しておくことで、生徒が取り組みやすくなることを伝えた。

2点目は、(1)でも述べたように、言語化する活動を積極的に取り入れることである。授業の振り返りや導入時に、単元で扱う用語や概念の意味、解法の根拠などを言語化させる活動を位置付けることで、説明することや書くことへの抵抗感を軽減できること、また、全国学力調査で示されたモデル解答や採点基準を生徒にも示し、自身の解答や他者の解答と比較検討させることで、記述のゴールが具体的にイメージできるようになることを共有した。

以上の分析と研修での共有内容を踏まえ、本項のまとめとして、「記述式」問題における無解答率改善に向けた指導の方向性を整理する。「記述式」問題の無解答率を改善し、表現する力を育成するためには、書き方のテクニックを指導するのではなく、用語理解と記述指導を統

合することが求められる。先に提案した「生徒が自ら気づき、考え、表現する授業」を実現するためには、単に解き方を教えるのではなく、生徒自らが「なぜその用語を使うのか」「この概念は何を意味するのか」などを言語化する活動を通して、知識を「使える状態」にすることをめざしていく必要がある。このような実践を重ねることにより、「記述式」問題における、生徒の「根拠を用いての数学的な表現」を可能にしていくものであると考える。

5 課題解決に向けた取組（共通）

ここでは、これまでに示してきた各教科の課題を横断的に捉えたとき、課題解決の基盤となる「見通し」と「振り返り」の在り方について整理する。

『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料（中学校国語）（中学校数学）」で紹介されている事例において、単元の計画の「学習活動」の欄で、見通しをもつことと振り返りを行うことが明記されている。しかしながら、様々な研修を通して、見通しと振り返りの重要性は伝えているが、実際の授業では、めあての提示は行われているものの、教員や生徒の意識は十分ではないと感じることが多い。振り返りについても以前に比べると行われるようになってきたが、分かったかどうかを5段階で選ぶようなものや、「今日の授業で多くのことを学んだ。」のように何を学んだかが明確に分からないような記述など、振り返りの目的が十分ではないものが多くみられる。

そこで、今年度の研修でも、学習の流れを示し、「学習の見通しをもつ」「学習を振り返る」ことの重要性を伝えた。さらに、生徒が自分の学びを自覚したり、教員が自分の授業を改善したりできるような振り返りにするため、振り返りの観点の例を具体的に示した（図12）。ここに示した観点は、振り返りを「分かったかどうかの確認」ととどめるのではなく、生徒が自身の学習過程や課題を自覚し、次の学習につなげるための視点を明確にしたものである。

学習の「見通し」と「振り返り」を授業の中に適切に位置付け、その意義を踏まえた観点を意識した活動を設定することは、生徒の学びを深め、各教科の課題解決を支えるための基盤となるものである。

<p>振り返りの意義</p> <ul style="list-style-type: none"> ○教師が指導の改善を図るため。 ○生徒自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにするため。
<p>分かったか、分からなかったかの把握のみでは、振り返りが十分ではない。</p>
<p>振り返りの項目(例)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○学習で意識したこと。 ○身に付いた力やできるようになったこと。 ○課題を解決するために試行錯誤したこと。 ○前時までに学習したこと、本時の学習に役立ったこと。 ○頑張ったけれど、十分ではなかったこと。 ○学習したこと、今後の学習や生活の中で生かせそうなこと。 ○さらに学びたいこと。

図12 各種研修で用いたスライド

IV 研究の成果と今後の課題

1 本研究における成果

- (1) 全国学力調査の結果を基に、国語・数学における本県の課題を客観的に把握することができた。また、解答類型の分析を通して、児童生徒の誤答傾向やつまずきの要因をより具体的に明らかにすることができた。
- (2) 国語科においては、根拠や理由を明確にして自分の思いや考えを書く活動を増やすなど、記述力の向上を意識した授業改善がみられた。数学科においては、発問の工夫や問い返しを行うとともに、数学的な表現を用いて説明させる活動を積極的に取り入れるなどの授業改善がみられるようになった。

2 本研究における今後の課題

- (1) 国語・数学ともに、依然として「記述式」問題において正答率が低く、無解答率が高いという課題がある。今後も、課題解決に向けた授業改善を継続して進めていく必要がある。
- (2) 「徳島版読解力」については、2年目の取組となり、一定の浸透がみられるものの、さらなる充実が求められる。全国学力調査の分析結果を踏まえ、「徳島版読解力」を意識した授業改善の重要性を、今後も継続して発信していく必要がある。

V おわりに

確かな学力の向上を推進するに当たり、様々な取組の進捗を適宜評価しながら、P D C Aサイクルに基づき、進めていくことが重要である。全国学力調査は、生徒一人一人の学力・学習状況に応じた学習指導の改善・充実に向けて実施されている。その趣旨を踏まえ、各学校においては、全国学力調査の結果を十分に活用していただきたい。一方で、各学校や生徒それぞれの課題については、各学校のそれぞれの教員が自ら分析し、実態の的確な把握に努める必要がある。大切なことは、生徒の成長を信じ、目の前の生徒の学力や学習状況に応じて授業を工夫するなど、主体的に授業改善を図っていくことである。

今後も、現場の教員がこれまでの授業を振り返り、課題解決に向けた授業改善を進めることができるよう、実践可能な学力向上の方策を具体的に提案していきたい。

参考文献

- ・文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年度告示）』解説（国語編）（数学編）、2018年
- ・国立教育政策研究所教育課程研究センター『全国学力・学習状況調査解説資料（中学校国語）（中学校数学）』、2023年、2024年
- ・国立教育政策研究所教育課程研究センター『全国学力・学習状況調査報告書（中学校国語）（中学校数学）』、2023年、2024年
- ・国立教育政策研究所教育課程研究センター『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（中学校国語）（中学校数学）』、2019年